

日本に生まれて



若 者

森 勇 介*

「生産と技術」に投稿させていただく機会を承りましたが、何について書けば良いものかとあれこれ考えていました。というのも、これまで平木研究室でダイヤモンド薄膜の研究をしていた二人の先輩が既に本誌に寄稿されているため、研究に関する内容ですとあまり新鮮味がないのではないかと思ったからです。そこで、今回は私が研究室での生活を通じて学んだ研究以外のテーマについて書かせていただくことにいたします。私は電気工学科電気物性工学講座(担当:平木昭夫教授)において、学部4回生から助手をさせていただいている現在までお世話になっておりますが、是迄、研究の傍ら東西の様々な外国の人々と接する機会に恵まれました。年令とともに自分自身の考え方が変わって行くなかで、その経験がどのように影響していったか、私の自己紹介を兼ねる意味で、生い立ちに遡ってご紹介したいと思います。

私は大阪府交野市にある私市という所で生まれ育ちました。私市は「きさいち」と発音し、天の川の伝説や桜の名所として知られる片田舎であります。勿論、近所の人々は日本人ばかりなので、自分が日本人であることについて考えることもなく、いわんや外国のことをや、という感じで育ってきました。また、近所には同年代の子供が殆ど居ませんでしたので、私は外で遊ぶよりも家のなかで本を読むほうが多く、口だけは達者な子供であったと聞いております。そんな子供の頃、テレビで放映される洋画やニュースを通じて、漠然と『日本と外国』という関係

を知ったのが、私が幼心にも『外国』というものを意識した最初のきっかけであったと思います。当時テレビでは、いつも米国が強く、豊かで、自由で、そして正しいといった内容のものが放送され、私の中では米国文化の印象が徐々に蓄積されていきました。そして、比較的早熟であった私は、となりの芝は青く見えるという原理も手伝ってか、周囲の集団主義的な行動様式や年功序列の習慣よりも、西洋的個人主義や合理主義の方が優れていると思い込むようになりました。

幼少の頃、あまり身体の強いほうではなかったので、小学校に入ると両親の勧めもあって剣道を習い、中学生になってからはバスケットボールを始めました。運動すると力も強くなり、友達のなかでもいい顔ができるので嬉しくなって、益々身体を鍛えるようになりました。高校では、日本体育大学出身の怖い先生が顧問をされていましたのでチームも結構強く、一日中練習に励んで、授業中も食事と休憩に費やすという生活を続けておりました。先生の「も〜り〜、何や〜とるんや〜」の罵声と共にビンタを食らいながらも正選手になれた私は嬉しくて、家に帰ってもビデオを見て本場米国プロ選手のプレーを研究していましたが、オリンピックのドリームチームでもお分かりのように、プロ選手のプレーは余りにも凄く、私は改めて米国という国の強さに畏敬の念を抱くようになりました。

高校三年生になり、劣等生の部類であった私は、とにかく大学に受かるために勉強を始めました。幸い、体力はあったので半年間は受験勉強に明け暮れることができましたが、苦手な文科系科目は捨てて、理科系科目だけを勉強するといった具合でした。物理や数学は勉強するにつれて面白くなってゆき、そのうち、将来は科学者になればと漠然と思っておりました。と



*Yusuke MORI

1966年4月19日生

平成3年大阪大学大学院工学研究
科電気工学専攻前期課程修了現在、大阪大学工学部電気工学科、
電気物性工学講座、文部教官助手、
工学修士、ダイヤモンド薄膜

TEL 06-877-5111 (内線 5228)

ころが、この分野では教科書に出てくる天才や科学者たちは殆ど欧米人です。そこで私は「西洋的合理主義の思考過程を身に着けなければ一流の科学者になれないのでは」と考え、先ず自分の行動の合理化を目指しましたが、結果的には他人の気持を考えない言動が増えていっただけであったと思います。本人の自覚の問題もあると思いますが、受験勉強は道徳性の向上には逆効果になることが多いのでしょうか。そして、科学者になろうと思っていた私は理学部物理学科へ進学するつもりでしたが、父の勧めもあって大阪大学工学部電気工学科に入学しました。

大学二回生の夏になって、私は友人の開発隆弘君から「親戚が米国に住んでるから遊びに行かへんか」と誘われたので、もう一人の友人と一緒に四十日程ご厄介になることになりました。私にとって初めての海外旅行であり、かねてから憧れであった米国に行けるとあって喜んで出発したことを覚えております。到着して間もない頃は「あばたもえくぼ」の諺どおり、米国の悪いところにはあまり気付きませんでした。段々と慣れてくるに従い、いろいろなことが見えてきました。例えば、夜の町は本当に恐ろしく、「日本ほど安全な国は無いだろう」としみじみ思ったことや、また、東洋人として差別されることを初めて体験するなど、実際に行ってみないと分からないことが沢山あるものです。一方、良いことも色々ありました。その一つにゴルフを初めてプレーしたことが上げられます。御存じのように、米国ではゴルフ代がとても安く、5ドル払えば誰でもプレーできるので、初心者私達は暇潰しによく通いました。このときは「本当に豊かな国だなあ」と思ったことでした。

この時までの自分を振り返ると、まさに欧州や米国に現を抜かしてこれを尊敬し、これに模倣追随する終戦後の日本の風潮に似ていたと思います。そのような私の考え方に大きな変化が訪れたのは、平木研究室に配属されてからでした。当時、平木研究室ではダイヤモンド薄膜の研究が盛んに行なわれており、二人の中国人留学生、馬京昇さんと魏津さんが研究に従事していました。私もダイヤモンド薄膜の半導体化を

研究テーマに与えられたので、生れて初めて中国の人達と接することになりました。それまで、私には中国といっても「人口は多いが発展途上国で共産主義」といった印象しかなく、祖国日本についても微々たる知識しか持ち合わせていなかった。日中文化論の話になると私はとても恥ずかしい思いを致しました。彼らは中国文化に誇りを持っていて、いろいろと話を聞いておりますと、学校の授業では漠然と聞き流していた「日本は大陸の影響によって発展してきた」という事実を良く理解できるようになるなど、彼らは私にとって良い歴史の先生でした。

私が博士前期課程の頃に、今度は韓国の三星財閥系である三星電子(株)から文鐘さんが留学生として入学してきました。私よりも八才年上の文さんは、会社での経験も豊富で、私にいろいろなことを教えてくれました。そのなかでも、「韓国の学校では日本のことを良い国とは教育しません」という事実を聞いて私は驚きました。日韓の不幸な歴史について少しは知っていたものの、こんなに身近に感じるとは思ってもいませんでしたが、文さんの「でも、日本に来たら日本人は良い人達だということが分かりました。会社の同僚もそう言っています」という言葉を聞いて安心いたしました。また、文さんは「これから頑張って韓国を経済大国にするつもりです。そうなったら日本、韓国で中国を引っ張り、欧米諸国に負けない東洋圏を創りましょう。そのためには、日本と韓国の友好が重要です」と私に語ってくれました。東洋について関心が少なかった私は、以上のように中国と韓国の人達と接するにつれて「国際人になるためには祖国のことをもっと知る必要がある。そして、東洋についても理解しなければならない」と思うようになり、いろいろな本を読みだしました。そのなかでも、栗山奉行先生の「幻の哲学」に啓発されて、西洋的科学文明の他に東洋的精神文明が存在すると思えるようになったことは私にとって大きな進歩でありました。それからというもの、私は「自分の行為は常に日本人として責任あるものでなければならない。そのためには、日本人としての誇りと愛国心を持たなければならない」と思うようになりました。

生産と技術

が、その域に達するにはまだ付け焼き刃的知識しかなく、本当の意味での精神修行が足りないことを痛感している次第であります。

資源の少ない日本がこれから世界で活躍していくためには、エネルギー問題を解決する科学技術と、世界に誇れる精神文化を持つことが必要であり、大学はまさにその両方を指導する役

目を担っているところだと思います。私も、少しでもそのお役に立てるよう努力するつもりでございます。

最後になりましたが、本欄への執筆の機会を与えて頂きました工学部電気工学科教授白藤純嗣先生に深く感謝致します。

